

ペン俳句会 句会報(三五十三号)

令和六年二月一日(木)

兼題『立春』、席題『

句会を、今年一月と同じ場所で開催。

出席は九名。(投句十一名。元斐さんは投句せず

)

中村 晃也

病室の白き暗がり春を待つ

未黒野や松毬ひとつ焼け残り

枯野焼く火と陽の匂ひ混じり合ひ

山焼きや髪に残れる火の匂ひ

薄紙を剥ぐやうに春忍び来し

新田 ゆふき

立春の雨黒々と幹伝ふ

鳩が胸広げてみしか春の雲

春立てり繰る障子戸の堅きまま

朝焼けの幕際にふと春の月

跳ね上がる雨の真直ぐに春浅し

大津 そうかい

焼け跡へ父祖の涙の寒の雨

子狐の随いてくるらし冬山路

居酒屋の手話のカップル春灯

誰も彼も唯一無二ぞ冬怒濤

春来る憂ひ悲しみ消えまほし

松田 一文字

春立つや川面に跳ねる陽のひかり

元旦の地震や市場を焼き尽くす

雪積もり地震の惨状隠しけり

節分や家路を急ぐ若き父

冬晴の空真青なる大櫛

浜口 金魚姫

春来る行先自由のモンステラ

手繋ぎて影はひとつに春夕焼

薔薇窓の光散りばめ春兆す

放たれてどの雲目指す赤風船

春来る今こそ行かねば行かねばと

宮原 凧

食べきれぬほどを並べて歳の豆

春めきて風のやわらぐ水の面

日めくりやきりつと剥ぎて春立てり

初恋の名札のトマト春来る

前世も来世も無しどんど焼

志村 良知

立春や染付皿の卵焼

山梔子のくれなゐ褪せて春隣

寒木瓜のゴツ木のタツ子枝の先

大寒波雲妖しげと妻の声

梅老ふや満開の枝地に這ひて

長尾 進一郎

足元の草の弾力春来たる

立春の声や草々急ぎ出づ

バス待てば頬を撫で行く春の風

めらめらと野焼の炎拡がりぬ

暖冬に慣れし体や氷点下

安藤 晃二

大寒やかかあ天下の御焼き喰う

まつゆき草咲くとふ林分け入りぬ

鳥去りし電線静か春立ちぬ

朝日影障子に映し春立ちぬ

春立つや並木の花芽(かが)のなほ固し

内藤 まりこ

寒の朝高野の山を巡る夢

あそこにも雪の富士見ゆ散歩道

新聞を畳に読んで日向ぼこ

どんど焼きにかざす後ろ手温もりぬ

終演の撥ねし立春夕明かり

西川 知世

焼売の湯気を豊かに春立ちぬ

天涯へビルの伸び切り月朧

地震の地に遠く身を置き春浅し

密密と朝の陽重ね寒牡丹

今回は令和六年三月七日（木）、
兼題は季語「梅」（中村晁也さん出題）、
席題は西川知世さん出題の「口」です。

ですべての物、言葉が必要でかつ響き合っていて、梅の若枝、月が見えていると思える。俳句はなかなか奥深いことである。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

梅は、ほとんどの歳時記、季語集に、春の植物の項の最初に揚げられている。現在では、花といえは桜を指すが、万葉集では梅のことだそう。色は紅・白・淡紅、形は八重・一重・大輪・小輪とあり、それぞれ趣が、写生句には格好の題材である。

梅の季語では、ペン俳句句会を始められた平間真木子師と俳句初学の私とのかみ合わない会話を思い出す。…

「梅若菜まりこの宿のとろ汁 芭蕉」

これは、季語の集まりではないの？

「春もやゝけしきとゝのふ月と梅 芭蕉」

これは？

それはもつと俳句に親しめばわかるのよ、が返事であった。

「梅」のために開いた手持ちの一番古い虚子編の歳時記にこれらの句を見つけて…思い出した。いまでも解決できないままではあるが、短い句の中

二もとの梅に遅速を愛すかな 蕪村

藪尻の賽銭箱や梅の花 一茶

小僧皆土の子や梅の寺 虚子

老幹の横たはるあり夜の梅 素十

暮れそめてにはかに暮れぬ梅林 日野草城

早梅の枝くぐりたる力士かな 川崎展宏

どこからといふこともなく梅匂ふ 今井杏太郎

白梅の日向にゐたり船大工 大峰あきら

直情型の父の血があり夜の梅 藤田湘子

いの字よりはの字むつかし梅の花 夏目漱石

ぬかるみに梅が香低う流れけり 小津安二郎

脱ぐやうに解く肩車梅日和 嘴朋子